

| | |
|------------------|---|
| Title | 冷戦とベルギー・キリスト教民主主義政党：分裂危機を念頭に |
| Author(s) | 松尾, 秀哉 |
| Citation | 聖学院大学総合研究所紀要, -No.54, 2013.2 : 199-241 |
| URL | http://serve.seigakuin-univ.ac.jp/reps/modules/xoonips/detail.php?item_id=4719 |
| Rights | |



聖学院学術情報発信システム : SERVE

SEigakuin Repository and academic archiVE

冷戦とベルギー・キリスト教民主主義政党

——分裂危機を念頭に

松尾 秀 哉

はじめに——ベルギー分裂危機とキリスト教民主主義政党

西欧の小国であるベルギーの政治は二〇〇七年以降混乱している。ベルギーはフランデレン（オランダ語）とワロン（フランス語）とからなる多言語・多民族国家であるが、二〇〇七年の連邦選挙以降、フランデレン諸政党とワロン諸政党との政権合意が困難で、約半年の政治空白を経験した。さらに二〇一〇年の連邦選挙後には一層合意形成が困難となつて、約一年半もの政治空白を経験した。

本稿の目的は、こうした状況下のキリスト教民主主義政党のアイデンティティを検討することにある。冷戦終結後、こんにちの混乱に至る過程で、ベルギーのキリスト教民主主義政党はいかなる政党と化したのか。この点で、とくに二〇一〇年の政治空白で重要な役割を果たした、フランデレンのキリスト教民主主義政党（Christen-Democratisch en Vlaams、以下CDV）に注目することとしたい。さらにいえば、この混乱の重要な要因となつた民族主義政党との選挙

カルテルの形成に注目して、アイデンティティ（の変化）を考察する。

次節では冷戦後のキリスト教民主主義政党の動向を概観し、改めて問題を提起する。さらに先行研究を整理しつつ、問題の意義と本稿の分析視角を確認する。その後、第三節では冷戦期のキリスト教民主主義政党の概要を論じ、四節で冷戦後のキリスト教民主主義政党の動向を検討する。最後に現状のCDVを概観し、今後の展望を検討してみたい。

本稿の結論を先んじて提示すれば、第一に、冷戦期には反共産主義という立場から「人格主義」を謳っていたキリスト教民主主義政党が、冷戦後、政党間競合の高まり、そしてベルギー政治の変化に対応するため、徐々に「フランデレン・キリスト教民主主義」化していった。

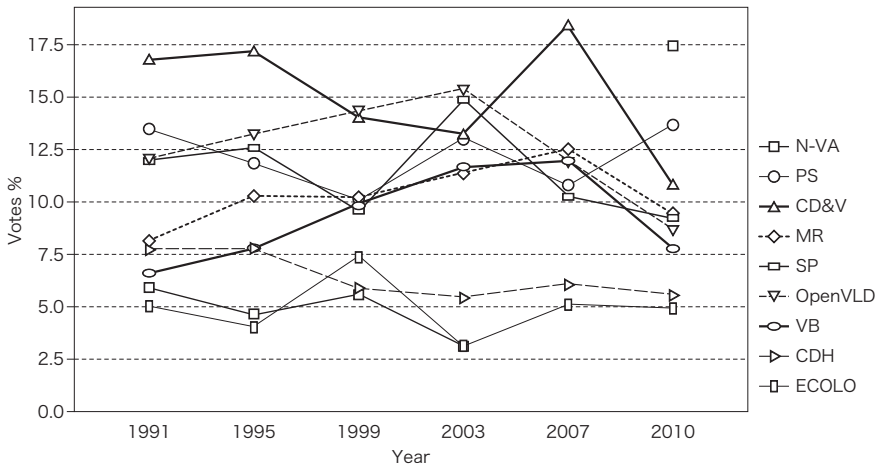
しかし、第二に、二〇〇七年以降の混乱を経て、キリスト教民主主義政党のアイデンティティは、総じて、確たるイデオロギーを欠いた「現実主義」と形容すべきものと化しており、しかしそれゆえに分極化するフランデレンとワロンをつなぐ役割を果たしうる政党でもあり、それが期待される、というものである。

1. 冷戦後のベルギー・キリスト教民主主義政党——概要と問題設定

ベルギーのキリスト教民主主義政党は、一八八四年に、当時の自由党政権の反教権主義的政策（カトリック系私立学校への補助削減等）に対抗して「カトリック党 (parti Catholique)」として結成され、その後およそ第一次世界大戦後まで単独政権を維持してきた。

しかし第二次世界大戦の前後にはフランデレン主義およびワロン主義運動が高揚した。その後一九六〇年代には双方の対立（言語問題）が激しくなり、当時の「キリスト教人民党／キリスト教社会党 (Christelijke Volkspartij/Parti

図1 得票率の推移



出典：NSD: European Election Database - Belgium
http://www.nsd.uib.no/european_election_database/country/belgium/

Social Chrétien. 以下CVP / PSC)は二つの地域政党(フランデレン: CVP / ワロン: PSC)へと分裂するに至る。当時からキリスト教民主主義政党の選挙パフォーマンスは低下していたが、それでもフランデレンにおけるCVPの支持率は相対的に高く、その後もキリスト教民主主義政党は連立与党(首相輩出政党)の地位を維持してきた。この間、第二次世界大戦直後の一時期を除いて、キリスト教民主主義政党が野に下つたのは、一九五四年からの四年間だけであった。⁽¹⁾

しかし図1に見るとおり、ついに一九九九年、フランデレンでCVPは第一党の座を自由党に奪われ、連立にも加わらず、その後八年野党の地位にとどまることになる。

この間、ベルギーは九三年に連邦制度を正式に導入する。また、二〇〇一年以降にCVPとPSCは、それぞれCDVとCDH(人道的民主センター: Centre démocrate humaniste)とに党名を改称する。

その後行われた二〇〇四年の地域議会選挙でCDVはフランデレン民族主義政党N-VA(新フランデレン

同盟：Nieuw-Vlaams Alliantie）と選挙カルテルを組み勝利し、さらに分権化論議が一層高まっていくなかで行われた二〇〇七年の連邦選挙では、やはりN-V-Aとカルテルを形成して、与党の座に返り咲くことになる。しかし上述のように、この選挙の後ベルギーは連立合意交渉が進まず、約半年の間新政権を組むことができずに、いわゆる「分裂危機」に陥る。さらに二〇〇八年三月から発足したイヴ・ルテルム（Yves Letermé）によるCDV連立政権は短命で終わり、その後紆余曲折を経て二〇一〇年六月に再び連邦選挙が行われる。ここでは先のN-V-Aが躍進し、他方でCDVの支持は凋落し、さらにその後の政権合意交渉には一年半もの時間を要した。ベルギーの各紙はこれを「政治危機」と評し報道した。

この二〇一〇年以降の政治危機で公式に交渉のイニシアティブを採ったのはフランデレン、ワロンそれぞれで勝利したN-V-AとPS（ワロン社会党：Parti Socialiste）²⁾でありCDVやCDHではない。しかしこの交渉で最終的に重要な役割を果たしたのがCDVであった。

かつてキリスト教民主主義政党は、長くベルギー政治を与党として支えてきた。換言すれば、一九世紀末の民主化から戦後復興、福祉国家の建設等、ベルギー政治の近代化を推進する中心的アクターであった。しかし、冷戦後のCDVは、N-V-Aとカルテルを組み、一見フランデレン主義化し「分裂危機」の推進者と化してしまったかのようにも映る。武居一正は、「……一九九九年の野党への転落後から、党改革も思うような結果が出ず、N-V-Aとのカルテルにまで至ってしまい、まるでキリスト教民主党とは言えなくなってしまう感があった」（武居、二〇一二・三八六）と述べる。

以上のように経緯を整理し、また二〇〇七年連邦選挙における（現時点では「一時的」とも見える）選挙パフォーマンスの上昇を考慮する限り、さらに二〇〇七年以降のベルギー政治の混乱を重視する限り、おそらく最大の注目点は、民族主義政党N-V-Aとのカルテル形成であろう。どのようにして、CDVはカルテルへと至ったのか。そしてその政

党のアイデンティティは何か。本当に「キリスト教民主党とは言えなくなってしまうた」のだろうか。本稿は、とくにカルテル形成期の動態に注目して、冷戦後のCDVのアイデンティティを検討するものである。

2. 先行研究と分析視角

2-1 キリスト教民主主義政党に関する先行研究

キリスト教民主主義政党に関する研究は、一九九〇年代にその起源 (Kalyvas, 1996) や、アイデンティティ (Hanley, 1994) をめぐって議論が進んだ。また福祉国家建設に果たした意義、それを通じて独自性をめぐる議論が盛んになされた (van Kersbergen, 1995)。

かつて、「保守主義」政党と同一視されていたキリスト教民主主義政党のアイデンティティを、アーヴィンは「人格主義 (personalism)」（Irving, 1979）と論じた。「人格主義」とはフランスのカトリック思想家、ジャック・マリタンなどによってまとめられた戦後キリスト教民主主義思想の核をなす用語である。本来原罪を抱える人間は、超越者との関係形成において「全き存在」となりうる。すなわち人格主義とは、人間の原初的共同体としての家族、共同体の形成を通じて「人格」の成長を謳う。単なる個人主義とも全体主義とも異なり、個人と社会の相互作用的な結合を是とし、⁽³⁾ 具体的な政策面では家族政策を重視するものである。

その後九〇年代の議論のなかで、ファン・ケルスベルヘンは、キリスト教民主主義勢力による福祉国家の特徴を、資本主義を容認しつつ、社会民主主義勢力とは異なり家族政策を重視している点に見て、「社会的資本主義 (Social

Capitalism)」と論じている (van Kersbergen, 1995)。こうした独自性を、たとえば水島治郎はキリスト教民主主義政党の政策を総括して「キリスト教民主主義的」「第三の道」(水島、一九九三、二〇〇八)と論じていた。

他方で、同時に、各国のキリスト教民主主義政党の得票率、議席獲得数は相対的に低下していた。一九九〇年代にはイタリア、ベルギーなどでキリスト教民主主義政党は与党の座を追われ、それ以降キリスト教民主主義政党をめぐる議論は「ミネルヴァの梟」として扱われるに至った(田口、二〇〇八：一三)。その結果一九九〇年代以降のキリスト教民主主義政党研究は、国内政治に着目するものよりも、主に各国キリスト教民主主義政党(もしくはその連合)が欧州統合に果たした役割を論じるものが主流となった(Lamberts, 1997; Van Hecke and Gerard, 2004; Van Kemseke, 2006; Kaiser, 2007)。⁽⁴⁾

しかし、近年に至り、しばしばキリスト教民主主義政党が与党に返り咲く場合もあり、再びキリスト教民主主義政党への注目が高まっているようにも思われる。たとえば九〇年代の議論をリードしたカリヴァスとファン・ケルスベルヘンは「殆どのキリスト教民主主義政党は死の床からよみがえった」(Kalyvas and van Kersbergen, 2010: 192)と述べ、その意義を論じようとしている。

ただし、こうしたキリスト教民主主義政党に「再注目」している研究の多くは、やはり欧州統合との関連を中心に論じている傾向がある。また国内政治を論じるものにしても、冷戦後のキリスト教民主主義を論じる研究はアメリカ、ドイツ、イタリアに集中している (Doležalová *et al.*, 2001; Kalyvas and van Kersbergen, 2010)。では、ベルギーのキリスト教民主主義政党はどのように扱われているのであろうか。

たとえば二〇一〇年からCDV党首に就任したウォーター・ベーク(Wouter Beke)は、かつて、一九九〇年代以降の得票率の全般的低下の要因、支持者の地理的傾向、そして綱領などを分析し、「ベルギーのキリスト教民主主義政党が地方政治の文脈で行動しているという事実」(Beke, 2004: 133)を見いだした。そして、(執筆時において)今やキリ

スト教民主主義政党は「人格主義」から「コミュニティアニズム」⁽⁵⁾へ近づいている (Beke, 2004: 119) と述べつつ、当時のベルギーのキリスト教民主主義政党の「アイデンティティの弱さ」を主張した (Beke, 2004: 158)。

また、近年のベルギーのキリスト教民主主義政党研究をリードするステイーヴン・ヴァン・ヘッケは、結局のところ二〇〇七年以降再び政権を維持できている点や地方での選挙の強さ、カトリックのネットワーク (いわゆる「柱」) のなかで優れた人材を輩出できる点、欧州人民党との関係などに注目し、冷戦後のベルギー・キリスト教民主主義政党の「強さ」を主張して、「オランダとは異なり、キリスト教民主主義の終焉ということとは、あまり語られていない」と述べている。確かに一九九九年からの野党時代を「わずか八年」と考えれば、キリスト教民主主義政党はなお強い。ヴァン・ヘッケは「政権党」であることにそのアイデンティティを見いだす (Van Hecke, 2012: 10-11)。

しかし他方でヴァン・ヘッケは、(二〇一〇年の敗北を念頭に) 選挙パフォーマンスにおいて「近い将来、CDVが選挙において以前のような地位や支持レベルを取り戻すことは非現実的」とも述べ、彼らが自らを「政権党」としてアピールしている限り、「これでは「党のアイデンティティが」曖昧になってしまうリスク」を指摘している (Bild)。
ヴァン・ヘッケによれば、いかにキリスト教的価値 (人間性、連帯、補完性) を他の政策に翻訳しようかが、今後のベルギーにおけるキリスト教民主主義政党の重要な課題である (Van Hecke, 2012: 9)。⁽⁶⁾

さらに、たとえば筆者は、二〇〇七年選挙におけるCDVの動向を連邦制度の導入と関連付けて「民族主義化」(松尾, 二〇一〇a) と述べたし、とくに近年のヨーロッパにおける連邦制研究においては同様の指摘が多い (Dettnerbeck and Hepburn, 2010: 121-122; Swenden, 2012)。

「人格主義」や「社会的資本主義」などは、それぞれの時代のキリスト教民主主義政党のアイデンティティを示しているものであろう。こうしたアイデンティティは可変的、流動的である。しかし、それにしても現在のCDVのアイデンティティをめぐる言説は「コミュニティアニズム」「民族主義」「政権党」など多様で曖昧である。分裂危機や政治

危機のなかでベルギーのキリスト教民主主義政党は——結論は時期尚早としても——いかなるアイデンティティを有する政党であると言えるのか。もう「キリスト教民主党とは言えなくなってしまう」のだろうか。

そこで、こうしたアイデンティティが流動的なものであることを考慮して、第一に、本稿ではCVPもしくはCDVのアイデンティティ（の変化）のプロセスを追う。第二に、とくにNVAとのカルテル形成期に注目してCVPのアイデンティティを明らかにする。さらに以下では若干分析視角について言及しておきたい。

2-2 分析視角⁽⁷⁾

政党のアイデンティティというとき、近年はしばしばマニフェストの内容分析を用いて歴史的変化を検討したり、政党比較研究が行われたりすることが多い。ベルギーにおいてもレジス・ダンドイらを中心に、精力的に研究が行われている（Dandoy, 2009; Dandoy, 2011）。（マニフェストや政策における）言説を通じて「アイデンティティ」を考えようとする点は本稿も同じである。しかし、本稿はNVAとの連携に至る過程を検討し、CVPないしCDVのアイデンティティを明らかにしようとする。むしろ注目したいはその過程である。そのため分析は記述的とする。

さらに以下では、補足的に、「背景」としての「冷戦後」という時代を、本稿がどう位置付けるかという点について記しておきたい。というのも、冷戦後国際社会が大きく変貌したことは言うまでもないが、その後の各国政治や政党の変化をそれと因果付けて実証的に考察するのは、実は難しいからである。

私たちは一九九〇年代以降の時代が政治的に特別な時期であると考える。いつの時代であっても標語を付す営みは恣意的にならざるをえないが、私たちは一九八〇年代終わりの出来事と一九九〇年代初期とを新し

い時代の始まりであると考え。一九八九年秋のベルリンの壁の崩壊、一九九〇年のドイツ統一、マースト
リヒト条約の締結、ソ連やユーゴスラヴィアの崩壊……これらの出来事は政治的な環境を完全に変えてし

まじた (Van Hecke and Gerard, 2004: 11)。

ヴァン・ヘッケやヘラルトが述べるように、共産主義の衰退やグローバル化の進展、ヨーロッパ統合の進展といった
様々な国際環境の変化が冷戦後の各国政党に影響を及ぼしている。さらにベルギーの国内的な変化に目を向ければ、連
邦化(九三年)などの大きな変化も生じている。これらはおそらく絡み合い、複雑に政党の行動に影響を及ぼしている
だろう。

こうした時代の複雑さを前提にして、本稿では、以下のような視点をもって冷戦後のCVPないしCDVの変化を
検討することにした。第一に、「……政党システムに目を転ずるならば、今まで少数政党であった自由主義政党がキ
リスト教民主主義政党に代わって主要政党になりつつあり、キリスト教民主主義政党の右の部分は自由主義政党、左
の部分は環境保護政党に浸食されているという構図になっている」(土倉、二〇〇八・二〇四)との指摘をヒントに
し、冷戦後ベルギーの政党間競争が高まっていることを前提として、N-V-Aとのカルテル形成に向かうCVPないし
CDVに注目する。

以上のような政党間競争の高まりは、ほかに「キリスト教民主主義勢力は冷戦によって中道化し、それによって各
国で強いポジションをえた」が、冷戦後「個人主義を台頭させつつ世俗化が進行し、自由主義や地域主義に有権者を奪
われた」(Lamberts, 2003, 122; 水島、二〇〇八・三三三)、もしくは「この現実には、ソ連の崩壊後、旧いエスニックもし
くはナショナルな忠誠心が飛び出してきた一九九〇年代初期、劇的に明らかになった」(Jurgensmeyer, 1993: 29)と
表現される。このように新自由主義や民族主義の台頭、すなわち政党間競争の高まりを冷戦の終結と関連付けるものは

多い。

さらに有効政党数の変化を見れば、ベルギーは、一九九〇年代から二〇〇〇年代にかけてその値が九・六であり、各国比較を行ったデータ上最多となっている⁽⁹⁾ (Lane, 2008: 180)。とくにフランデレン選挙区においては、一九六一年まで二ポイント代であったものが上昇し続け、一九八〇年代後半には三ポイント代に、以降、二〇〇七年までは、変動しつつ五ポイント以上を記録している (Delwit, 2011: 33 Figure1)。こうした数値だけですべてを判断することはできない⁽¹⁰⁾。しかし、冷戦後、ベルギーの政党システムが破片化し、政党が離合集散を繰り返していることは読み取ることができる。よってここでの「冷戦後」とは、一義的に政党間競合の高まりを意味することとし、そして他政党が台頭し、それがキリスト教民主主義政党を「浸食」し何らかの影響を及ぼしている、と仮定したい。

第二に、この時代におけるヨーロッパ統合の影響も考慮されねばならないかもしれない。たとえば吉田徹はかつてフランス主要政党が国内政策の失敗を取り戻すために「ヨーロッパ化」したと論じた (吉田、二〇〇八)。しかしシュミットによれば、ヨーロッパ統合がベルギーのような国家の国内政党政治に及ぼす直接的影響は、それほどはつきりしたものではない。というのも、「連合政権が……様々なアジェンダを掲げた数多くの政党を包括する」比例代表制を採用する国家では、選挙アリーナにおけるEUの影響は制限されるからである。つまり選挙では「親ヨーロッパ」VS「ユーロ懐疑主義」という争点は相対的に目立たず、むしろそれが影響するのは選挙後の政権形成においてである (Schmidt, 2006: 165-166)。

ただしベルギーにおいては、小島健が述べるように、概してベルギー国内における欧州統合に対する有権者の支持は高いものであり続けている (小島、二〇〇五: 五)。政党レベルでの「ユーロ懐疑主義」の存在は前提としにくい。とくに与党であり続けたCVP (PSC) は、しばしば欧州統合の推進者であることを、その成果として選挙キャンペーンでアピールしていた (松尾、二〇一〇 a)。つまり政党内ないし間で「ヨーロッパ」をめぐる対立は顕在化しておら

ず、この点でもヨーロッパ統合の直接的な影響を見ることはなかなか困難である。⁽¹¹⁾ よって、本稿では、ここに焦点を絞り込むことは避けるが、その影響を皆無と仮定することも避け、歴史的経緯を追うなかで、その影響と思われる点を個別に記すこととする。⁽¹²⁾

しかし、ここから示唆される点は、ベルギーのような多極共存型（合意型）民主主義国家の場合、比例代表制を採用しており連立交渉が必須であるため、さらに近年のベルギーの動向を見る限り、連立交渉過程のなかでアイデンティティを探ることもまた重要になってくるだろうという点である。そこで本稿では、とくに二〇一〇年六月以降の一年半の交渉過程にも目を配り、そこからもCVP(CDV)のアイデンティティを考察してみたい。⁽¹³⁾

歴史的に分析、既述を進めるにあたり、時代区分について触れておく。第一に、「冷戦後」を知るためには「冷戦期」の状況を把握しなければならない。従来のベルギー政治は主に「言語紛争」や「多極共存型民主主義」という視点で論じられてきた。本稿では、そこに可能な限り「冷戦」という視点を導入する。とくに一九六〇年代がベルギー政党システムの大きな分岐点であることは既に論じられてきた(Deschauer, 1999)。キリスト教民主主義政党が地域政党へ分裂した(一九六八年)のである。これを冷戦という背景を考慮して再解釈してみたい(この時代を取り上げるもう一つの意図は後述する)。

第二に、冷戦後のCVPについては、主に(1)一九九九年までの与党時代、(2)一九九九年以降の野党時代に区分する。アイデンティティ(の変化)に関する限り、与党であるか野党であるかの区別は重要であろう。とくに野党時代には「変化」が生じやすいだろうからである。繰り返しになるが、ここではとくに二〇〇三年以降のN-VAとの選挙カルテル形成を中心に検討を試みる。

第三に、その後の二〇一〇年の「危機」における動向を追いつつ、そのなかからCDVのアイデンティティを考察し、現下の動向と合わせて総括してみたい。

3. 冷戦期のベルギー・キリスト教民主主義政党

3-1 冷戦と超階級政党

本節では、主に冷戦期のベルギーにおけるキリスト教民主主義政党の特徴を簡単にまとめておきたい。

ベルギーのキリスト教民主主義政党は、一八八四年に当時の自由党によるカトリック系私立学校への補助金削減政策に対抗して、自由主義カトリック派、教権至上主義派、ならびに反自由主義的立場を採る保守政治家グループによって結党された。同年の選挙で勝利し与党となったカトリック党は、社会主義運動の台頭に対抗し、その後独自にカトリック労働運動（キリスト教民主主義運動）を取り込んで、強大な超階級政党へ成長した。同時に「初めての社会立法」といわれる様々な社会保障法や男子普通選挙制、比例代表制の導入に尽力した（松尾、二〇〇〇）。同時期、社会主義政党も成立し、第一次世界大戦後の復興期における挙国一致内閣の成立を機に、ベルギーは連立政権時代へと突入する。

第二次世界大戦後の頃ベルギーではドイツ・ファシズムの影響を受けたレックス党 (Rex) が主にカトリック党から分裂し台頭したが、ファシズムの敗北とともにそれは消滅していった。しかしベルギー共産党は一九四五年に九万人近い党员を集め (Delwit, 2011: 31. Tableau 2)、¹⁴ 与党に加わっていた。

ベルギーの場合、前述した経緯をもって成立したカトリック党は、その後CVP/PSCと党名変更するが、超階級政党として、派閥対立を内に含み——自由主義カトリック派とキリスト教民主主義派の対立は激しいものではあったが、それゆえに——党全体としては右にも左にも偏りすぎない政党であった。派閥対立はあったものの、第一に

「ファシストと共産主義者によるキリスト者の迫害は、カトリックの統一の必要性を高め」つづいた (Reese, 1996: 28)。
第二に、各国キリスト教民主主義政党のリーダーたちが、派閥対立の処方箋として反ソ・反共産主義的主張を採った (Conway, 2003: 53-54) のであり、いわば「カトリック政党の超階級的性格が……冷戦において一定の役割を果たした」 (Strikwerda, 2003: 268) のであらう。⁽¹⁵⁾

この当時 (一九四五年) からベルギーのキリスト教民主主義政党が打ち出していたのが、先の個人と社会との実存的結合を謳った「人格主義」である。つまり冷戦構造の下、超階級的性格を有する CVP / PSC は、いずれにも偏らない、中道的な「人格主義」を打ち出し、与党として労使協定、学校協定 (五八年) など国内の紛争解決に尽力していた。⁽¹⁶⁾

その後ベルギー共産党が急激に支持者を失っていく。このような極右・極左の弱体化を、水島は、オランダを主な事例として、多極共存型民主主義国家における柱状化した社会の政治的帰結とする (水島, 二〇〇一)。共産主義勢力が衰退してもなお CVP / PSC が強かった要因を考えると、水島の指摘は誠に示唆的であるが、冷戦構造という要因も、キリスト教民主主義政党が戦後のベルギーの政党システムにおいて確固たる地位を得た環境要因として無視はできないだろう。⁽¹⁶⁾

すなわち、大戦直後の共産主義勢力の台頭に対抗して、それを対抗勢力とした、ある意味典型的な「広い階級を包摂し社会政策を重視し政権を維持する政党」 (Kalyvas and van Kersbergen, 2010: 191) が、当時のベルギーのキリスト教民主主義政党であった。

3-2 冷戦と地域政党への分裂

その後、一九五〇年代末から一九六〇年代のベルギー政治、そしてそこにおけるキリスト教民主主義政党は混乱する。その帰趨は「冷戦」という枠組みで括るよりも、本来は言語紛争の高まりという枠組みで括るべきであろう。

一九五八年に政権に就いたCVP/PSCは、先の学校協定の締結後、言語境界線やブリュッセル首都圏（両語圏）の確定をめぐる問題に揺れた。この過程では、社会党を離れワロン運動を組織したアンドレ・ルナル（Andre Renard）、こちらには自由党からワロン連合（Rassemblement Wallon）を組織したフランソワ・ペラン（Francois Perin）などによって、既成政党は地域主義政党へと分裂していく。CVP/PSCもルーヴァン大学紛争において、一九六八年にはCVP（フランデレン）とPSC（ワロン）とに分裂する。すなわちキリスト教民主主義とフランデレン主義が分離したのである（傍点筆者。以下同じ。この傍点の意味については後述）。

キューバ危機の直後（一九六三年）、教皇ヨハネ二三世が武力抗争の回避と世界平和を願う回勅『地上の平和（Pacem in Terris）』を⁽¹⁷⁾発布したが、まさにその時期ベルギーは先の言語境界線やブリュッセル域の確定をめぐる言語法制定をめぐって揺れていた。このように、当時のベルギーのキリスト教民主主義政党は、言語紛争に対応するなかで大きく変化していった。

ただし、以下の点には留意してみたい。一九六八年のルーヴァン大学紛争処理を通じた政党分裂の時期を、冷戦構造の変容の時期と重ね合わせるならば、この時期はデタント、米ソの覇権の低下、つまり戦後秩序の変容のときでもあった（菅、二〇〇一…三一五）。イマニュエル・ウォーラーステインらによれば、この時代は古い反体制的運動が体制内化し、それらへの幻滅が高まり、新しい抵抗運動が生じた時代でもある（アリギ、ウォーラーステイン他、一九九八）。

ルーヴァン大学紛争は基本的に言語の対立であったが、他方で既成権力への抵抗運動でもあった。すなわち当初「ワロンよ、出ていけ」（言語対立）と叫ぶフランデレンの学生、教授陣が、その後大学運営サイド（カトリック司教陣）、そして政府（ファンデンボイナツ・カトリック自由党政権）が何も手を打たないことよって、共闘して「教権主義、資本主義、統一主義の結合」した当局に対して批判を高めた。それによつてこそ、ルーヴァン大学紛争は政党を二分する大きな政治的紛争と化したのである（松尾、二〇一〇b・一二三）。

つまり、この時期にキリスト教民主主義政党が分裂し支持を低下させた遠因として、冷戦構造の変化のなかで、ベルギーにおける既成権威（カトリック教会そしてキリスト教民主主義政党）への抵抗運動が生じたという側面を挙げることも可能かもしれない。本来こうした運動は共産党などの既成左翼が体制内化した国家で「新左翼」運動として台頭するが、ベルギーの場合、既に共産党は一九六〇年代には、全盛期の六分の一程度、一万五千人ほどの党員しか有せず（Delwit, 2011: 31. Tableau 2）、「体制内化した政党」に対する抵抗運動は——言語紛争を背景に——当時のベルギーでは与党であるカトリックという権威に向かつていったとも考えられよう。¹⁸

もし冷戦による対立が強固な時にはキリスト教民主主義政党は支持を集め、それが緩んだ時には支持を失うのだとすれば、八〇年代のいわゆる「新冷戦」の時期には、キリスト教民主主義政党は支持を回復するはずである。¹⁹しかしベルギーにおいて事態は逆であった。むしろ八〇年代には支持を減らし続けた。この時期、ミサイル配置問題（一九八四年）をめぐつてベルギー政治は混乱した（CDVHP）。既にベルギーでは約半数の市町村が「非核都市宣言」を行っていた。この現象自体が新冷戦の産物であり、ある意味冷戦が与党としてのCVPを揺るがした例とも言える。冷戦は、今や平和運動へ市民を駆り立てる要因と化したのである。

つまり六〇年代を境に、冷戦構造がCVP/PSCへ及ぼした影響は変化していると考えられる。それ以前は超階級的キリスト教民主主義政党を支持する要因であり、CVP/PSCに与党の地位を付与した。しかしそれ以降は反

体制（反核、平和運動を含む）運動のターゲットとして、与党としてのCVPないしPSCが批判される要因となったのである。

ただし、この時期のCVPのアイデンティティが、先の「人格主義」から大きく乖離したとは言えない（Congress CVP 1986, cited in Van Haute, 2011: 44. 後述）。分裂し支持も低下したが、与党であることは変わらず、反共産主義的「人格主義」は維持された。

4. 冷戦後のキリスト教民主主義政党

たとえばイタリアでは、「国内政治における『切り札』としての『共産主義の脅威』に負っていたキリスト教民主主義政党の一九九四年の溶解は、ソ連の西欧に対する脅威が消滅したことによる」（Kselman, 2003: 1）として、キリスト教民主主義の崩壊は関連付けられる。イタリアほど共産党が強くなかったベルギーにおいて、キリスト教民主主義政党はどのように変貌したのだろうか。

4-1-1 与党時代のキリスト教民主主義政党

冷戦後のCVPやPSCが直面した問題については、ベーケが詳しい。まず最大の敵は自由党であった。「一九八八年から一九九九年までキリスト教民主主義者は社会主義者と連立を組んだ。自由党は……一貫してキリスト教民主主義者の右派をターゲットとした。それゆえキリスト教民主主義者の主な挑戦者は社会主義ではなく、むしろ自由主義者で

あった。自由党はかつて重要な役割を果たさなかった。しかし一九九〇年代を通じて、自由主義者はキリスト教民主主義者に代わる主要な政治勢力となっていた」(Beke, 2004: 134)。

さらに「環境政党がキリスト教民主主義の進歩派と競合した。とくに彼らは、伝統的にキリスト教民主主義政党と強く結びついていたキリスト教労働総同盟(キリスト教労働運動)との結びつきを試みた」。これはとくに労働運動とのつながりが相対的に弱いワロンで成功する(Beke, 2004: 135)。

さらに、「フランデレンで顕著であったのは、自由党の進捗だけではなく、フラームス・ブロック(Vlaams Blok、以下VB)の台頭であった」(Ibid.)と述べられるとおり、民族主義政党の台頭も著しいものであった。エルクによれば「一九八〇年代、VBは右派の中の小さな勢力でしかなく、フランデレン・ナシヨナリズム、反共産主義、反中絶、そして差別的、親対独協力者の政策を掲げていた。冷戦の終結に伴って、VBは移民問題を新しいイシューとして取り上げた」(Etk, 2005: 496)。

ここに示される移民問題が重要な政治的イシューと化したことは、冷戦終結の帰結のひとつであろう。これによって移民排斥主義政党が支持を集めるようになったのである。それを取り上げたVBが既成政党の対抗勢力として台頭したのが、冷戦後初となる一九九一年の国政選挙である。この選挙は一般に「黒の日曜日」と呼ばれる。キリスト教民主主義政党(CVP/PSC)の得票率は初めて二〇%台を下回ることになった。

この間CVPは、先の八六年党大会での決定に基づいて基本的に「人格主義」を維持してきたが、詳細に見ていくと「社会的、人格主義」や「連帯」など、微妙にずれていることも確かである(Van Haute, 2010: 44)。「社会的」や「連帯」が新自由主義に対抗した結果生み出されたものだとすれば、これは「冷戦後」のひとつの帰結と言える。冒頭で記したベークのいう「コミュニティアニズム」は、この点を意図するものであろう。しかし一九九〇年から始まった人工妊娠中絶の法制化の際、カトリック信者であった国王の署名拒絶(CDVHP)に直面し、逆にカトリック的「人格

主義」政党としての信頼を失っていたとも考えられる。

九一年の選挙で得票率を低下させた後も、CVPの支持率低下は——九五年の回復を一時的すれば——とまらなかった。第一に、ヨハン・ヴァン・ヘッケ (Johan Van Hecke) を中心にマニフェスト、党首の選出方法の見直し、地方の自律性強化などの党改革が謳われ (Beke, 2004: 140-141)、九三年には「国民目線の政治」を打ち出す (CDVHP) もの、その後ヨハンは私的な要因 (離婚と再婚) によって一時政界を離れ、後に自由党へ加入していく。自由党は九〇年におおよそ七万人の党員を抱えていたが、その後二〇〇〇年までに八万人程度に増やすことに成功した。他方で同時期のCVPは一三万人ほどの党員が一〇万人へと減少している (Delwit, 2011: 30 Tableau)。ヨハンの離党のイムパクトは十分に計り知れないが、なお人格主義、すなわち家族 (政策) の重視を打ち出していたCVPにとって、その時期支持の高かったリーダーの「離婚」は信頼を失った一つの要因であったとも考えられる⁽²⁰⁾。

第二に、この間、九六年以降はEMUに加入したものの、それによって内政については財政締め付けの必要が生じて、社会保障の創出ができなかった (Beke, 2004: 142)。いわば財政の縛りがきつくなったのである。この点でも「人格主義」は袋小路に入った。

さらにはヨーロッパ全土を震撼させた幼児性愛者デュトルー事件に端を発する大規模なデモへの対処と閣僚交代、司法制度改革、さらには九七年からルノー・ヴィルヴォルド工場の閉鎖問題が生じて雇用創出などに追われていた (CDVHP)⁽²¹⁾。

九九年の選挙では、CVP執行部は「EMU加入」の成果によって選挙に勝利できると考えていた (Beke, 2004: 142)。前述の通り、「ヨーロッパ統合の進展」は過去のベルギー与党がしばしば選挙キャンペーンにおいて成果として掲げたものである。しかし、そうしたなかで生じたのが、九九年選挙 (緑の日曜日) における「ダイオキシン問題」である⁽²²⁾。これによって与党であったCVPと社会党は得票率を激減させ、自由党、VBと環境政党が議席を伸ばすこと

によって、CVPは政権を追われることになった。

要するにCVPは、与党として、冷戦終結後の、もしくはEUの進展に伴う、社会の変化に対応することに追われて、台頭する他政党に対して結局「人格主義」を維持する以外の対抗策を講じることができず、さらにその「人格主義」も政治不信を招いて、いわば自滅したのである。⁽²³⁾

4-2 N-VAとのカルテルに向かうキリスト教民主主義政党

ベーゲが「一九九九年までCVPは国を統治することにとらわれてきたが、一九九九年後は主に自分自身にとらわれた」(Beke, 2004: 133)と述べるとおり、一九九九年の敗北以降、CVPは本格的な党改革に乗り出す。しかしデハーネ(Jean-Luc Dehaene)ら伝統的リーダーが選挙敗北の引責で失脚後、党内は混乱し(Beke, 2004: 142-143)。一〇年で六人の党首交代を繰り返すことになった(Yan Hecke, 2012: 8)。

この間のCVPの動向について、後の党首、ルテルムは以下のように述べている。「私は「ヴェルホフスタット(Guy Verhofstadt)による自由党・社会党連立(いわゆる「紫」)新政権が少なくとも四年間は存続すると確信していた。……CVPの多くが、一九九九年に生じた新しい政治状況のもつ心理的側面を軽視していた。紫連合は新鮮で、新しい。しかもわれわれが入っていないのだ。……さらに二〇〇〇年と二〇〇一年には、著しい経済成長があった。CVPはこれに勝てないだろう」(Leterme, 2006: 67)。

このルテルムの発言から、CVPのリーダーの多くが「紫新政権」は短命であると考えていたことが推測される。党内は改革に向けて混乱していた。そのなかで状況を冷静に見ていたのがルテルムであった、とも映る。彼は二〇〇〇年から、当時の党首、ステファン・デ・クレルク(Stefaan De Clerck)と毎週コルトレイクを中心とした地方キャンペー

ンを張る。そこで見たのが「ステファンは今なお人気がある唯一の人」(ibid.)であった。すなわち、こうした地方での浸透度を見て、デ・クレルクとルテルムは、「CVPの根源」として「世界に通用するフラン・デレン」を掲げること打ち出す(CDVHP)。さらに二〇〇〇年の地方選(三三%獲得)を経て、二〇〇一年の九月二八・二九日、コレイクにおける会合にて、CVPをCDVへと改称することを決定する(CDVコレイク支部HP)。

つまり、CVPの「フラン・デレン」志向の背景には、CVP従来の地方での強さがあつたと考えられる。各先行研究が分析しているように、CVPは得票率三〇%台を割つたといつても、「CVP/CDVとPSC/CDHの一九九〇年代半ば以降のパフォーマンスを検討すると、……両党とも地方選挙において成功している」(Van Hecke, 2012: 4)。つまり地方では強固な根を生やしていた。さらに連邦化後、二〇〇一年の憲法改正では、宗教団体の助成が地域政府の管轄におかれることになる(Fox, 2008: 126)など、地域議会が党にとって重要なターゲットになっていった。

こうした状況下では、デハーネが「地方と中央の対立が党内に緊張をもたらすのは常である。党の構造は歴史に根を生やしており、改革には一〇年から一五年を必要とする。もし州レベルで党を再編しようとするなら、時間が必要だ」(Pilet, 2006: 217-218)と述べるように、性急な抜本的刷新はできなかつた。得票率は低下しつつも、地方では強く、よつてむしろ「地域」色を強く出すことで党の新しいイメージを創ろうとしたのである。

ただし、当時のデ・クレルクの地位が党内で安定していたわけではない。ルテルムはこの点を対談において以下のよ
うに答えている。

インタビュアー…『ステファン・デ・クレルクは、安全網も張らず、綱渡りしている』と、あるキリスト
教民主主義の政治家が言っていましたか……』

ルテルム…『そのとおり。そういうイメージは私も抱いていた。実際にそうだった。……』(Leterme, 2006:

つまり、これは、リーダーシップの弱さゆえ、当時の「地方」重視改革が党内で十分に行き渡らなかつたことを示唆する。

続く二〇〇三年選挙でCDVは「虹連合(自由党・社会党・環境政党の連合)」「による」世界の水準から見ればきわめて例外的な法「安楽死、同性愛者の結婚」²⁴に対抗し、家族の擁護を掲げた。従来の「人格主義」の潮流はなお強かつたのである。つまり、この時期のCVPは、内的に、従来の「人格主義」と新しい「フランデレン」とが混在し、リーダーシップの点から二つが対立していた。いわば過渡期である。しかし二〇〇三年選挙で敗北し、状況は変わっていく。

N-VAは、第二次世界大戦後から台頭していた民族主義政党の「人民同盟 Volksunie (以下VU)」が、二〇〇三年に分裂してできた民族主義政党である。ヴァン・ヘッケによれば、一九九九年以降のヴェルホフスタット自由党II社会党連立政権下においては、CDV、N-VAとともに野党であり与党に対抗する勢力であった。さらに二〇〇三年の選挙とともに敗北しており、両者は互いの勢力を二〇〇四年地域・欧州選挙で利用するため、公式に選挙カルテル(共通の名簿と共同の選挙公約)を結成した(Van Hecke, 2012: 6)。

ただし、このカルテル形成については、二〇〇二年から始められた選挙区改革の影響が大きい、というのが筆者の意見である。当時のヴェルホフスタット政権は主に民族主義的極右政党、VBの台頭に対処するため(各選挙区の)5%の阻止条項を導入しようとした。これは他の小政党にも大きな影響を与えた。たとえばやはりVUから分裂したSpirit (N-VAと比べれば穏健な民族主義政党)は、この阻止条項の導入に「阻止条項はあらゆる新しい社会運動の台頭を妨げる。きわめて非民主的だ」(le Soir 16/04/2002)と声明を発している。他方でN-VAは、『ベルギー分裂』、『フ

ランデレン国の独立』という先鋭化したフランデレンのビジョンは提示せず、『自治の促進』程度にとどめる」(Le Soir 04/05/2002)とし、そして若手のバルト・デ・ウエヴェール (Bart de Wever) を党首として、「N-V Aは明確に自らを民主主義陣営に位置づけた」(ibid.)。つまり、分離主義を掲げていた民族主義的小政党N-V Aは、この選挙区改革を通じて——少なくとも自らが称するには——「民主的」政党へと変わったのである。

他方で既成政党の側では、このころCVPで党首となつたルテルムによれば、「とくにフランデレンの政党はVUからの離党者を取り込み始めた。社会党はSpirit、自由党は他のVU出身者、Groen!までも抱え込み始めた」(Leterme, 2006: 118)。こうした傾向はワロンでも同様である。社会党(PS)のエリオ・ディ・ルポ (Elio Di Rupo) はPSCやワロンの環境政党に「左派連合」の形成を呼びかける (Le Soir 02/05/2002)。この連合は成立することがなかったが、阻止条項の導入で、ベルギーの政党アリーナはあたかも小政党の草狩場になつていた。

こうしたなかでCDVでは、「徐々に一貫した、かつ包括的な、党・社会・国家のイメージが育まれていた」(Leterme, 2006: 9)。ルテルムによればそれは「五〇年代終わりから六〇年代初めにかけてはお互いを殴りあつていた、キリスト教民主主義とフランデレン・ナシヨナリズムを結びつける」(Leterme, 2006: 118)ものであり、そのため彼は「今以上にフランデレン政府が重責を担っているときはない」、「国家は第一にフランデレンのためにあり、それからおそらくベルギーのためにある」(ibid.)とまで述べている。

先に六〇年代の政治について触れたもう一つの意図はこの点にある。ルテルムはなぜN-V Aだったのかと問われた時に、「フランデレン主義者との対話を避けるべきではない」と答える。なぜなら、六〇年代には、自由党からフランソワ・ペランらが、社会党からアンドレ・ルナルルらの地域主義者が分離したように、地域主義者は常に、どの政党にも存在しており、対話を避けることなどできないからである (Leterme, 2006: 118)。つまり、ルテルムが目指したものは、六〇年代に分離したフランデレン主義とキリスト教民主主義を結びつける「フランデレン・キリスト教民主主義」

というべきものであった。そして、既に草狩場と化していたベルギーの政党アリーナにおいて、最も適した対話可能なターゲットが、残された、「民主的」と自ら称すN-V Aであった。

すなわち、冷戦後の複雑な政党間競争の激化のなかで、民族主義政党の台頭を阻止するため導入された阻止条項が、小政党をめぐる選挙カルテルを促進させる土壌を作り出した。そして皮肉にも民族主義政党N-V Aを「民主的」な政党とした。さらにルテルムを立てたCDVを「フランデレン・キリスト教民主主義」化させ、CDVとN-V Aのカルテルを形成させたのである。

彼らの共通の綱領について見れば、『フランデレンにより力を。積極的で、暖かく、開かれた、そして包摂的な社会へ。』これがCDVとN-V Aの共同選挙の二つの軸である。……『フランデレンはより敬意を払われるべき』と両党は共通のマニフェストに記した。……CDVとN-V Aはフランデレン議会の解放を謳う。これは、フランデレンが健康保険や家族手当、雇用、(鉄道を含む)運輸、通信、科学政策において十分に権限を与えられなければならないということを意味する。……両党はまた法人税や治安、公正という点で、一層のフランデレンの自治を要求する。共同綱領の第二部は、フランデレンにおける教育、家族扶助、起業家支援、ケア、そして自発的結社の支持に焦点を当てている……」(Gazet 16/04/2004) すなわち「フランデレン・キリスト教民主主義」とは、フランデレンの「人格主義」的繁栄を目指すものであると言つてもいいだろう。

4-3 その後

その帰結については既に筆者も論じてきた。二〇〇七年の選挙では、CDVの党首ルテルムは「フランス語話者にはオランダ語を理解できない」などと民族主義的な言説によってキャンペーンを展開し勝利した。

しかし、その後の政権形成交渉でルテルムは調停に失敗し続け、ヴェルホフスタット暫定政権の成立まで約半年を要したことは何度も述べてきたとおりである。二〇〇八年三月に成立した第一次ルテルム政権においては国家改革を進めることができず、わずか九カ月で辞職する⁽²⁵⁾。その後成立した第二次政権でもルテルムは改革を進めることができず、二〇一〇年三月に辞職し、同年六月三〇日に再び選挙が行われることになった。

実はこの間のフランデン地域議会選挙（二〇〇九年）においても——地域議会選挙ゆえ当然ではあるが——CDVは選挙で「フランデンのために」（CDV HP）を打ち出している。しかし、この二〇一〇年六月の国政選挙では、CDVはマニフェストとして「フランデン」を相対的に強く掲げていない（CDV HP）⁽²⁶⁾。そしてこの選挙ではNVAが単独で勝利し、他方でCDVの得票率は過去最低を更新した⁽²⁷⁾。

こうした失敗を背景に、連立形成交渉の当初、CDVはフランデン側の交渉役でありフランデンの自治強化を強く主張するNVAに同調していた。「NVAが政権を外れることで再び選挙で支持を集めることを恐れ」ていたのである（*de standard* 16/02/2011）。しかし度重なる交渉の失敗により政治空白の世界記録を更新し、徐々に「CDVはNVAの後ろに隠れていたことを批判されるようになってきた」（*de standard* 20/07/2011）。

こうしたなかで新しい党首であるベーケは、条件さえそろえば交渉の席に着くことを明言し、その後も政権交渉は難航するが、ワロン側から譲歩を引き出し、政権形成に向けた交渉に参加する（*de standard* 26/07/2011）。他方でNVAはCDVの態度の変化を批判し政権からの離脱を表明して、結局政権交渉は、フランデン、ワロンそれぞれのキリスト教民主主義、社会、自由の六党を中心に進み最終的に新政権が成立した。

二〇一〇年の交渉過程においては、CDV、とくにベーケが果たした役割は決定的であった。当初はNVAに同調していたが、交渉が難航するなかでフランデンとワロンとのつなぎ役へと態度を変えた。

ここでのCDVの行動について党首であるベーケは、後に「政権に参加することは我々にとって良いことであると信

じている。その結果、共同体レベルと地域レベルとに、我々のメッセージを伝えることになろう」(Beke, 07/01/2012)と述べていた。すなわちCDVは一九九九年以降野党であり、二〇〇七年の選挙でNVAとの連合による「フランデレン・キリスト教民主主義」化によって政権に返り咲いた。しかし後に混乱を招いたためNVAとの関係を断った。にもかかわらず二〇一〇年六月の選挙では敗北した。そこで政権参入することによって、今後の不利を覆そうと方向転換したわけである。

ここままでを小括すれば、野党時代のCVP(CDV)はフランデレン民族主義政党NVAと選挙カルテルを組んだ。同時に、従来の「地方」色を強め、自らの政党を「フランデレン・キリスト教民主主義」に導くことになり、続く選挙で勝利するに至ったのである。

ただし、それ以降の動向はきわめて流動的である。二〇一〇年選挙では「フランデレン」を二〇〇七年と比べ強く打ち出さず、さらにその後の政権交渉の過程では、NVA側についていたり、ワロン側についていたりした。そこで以下では現在のCDVの状況に触れつつ本稿の結論をまとめ、展望を述べることにしたい。

結論と展望——現実主義がゆえの「超地域政党」？

ここまでの議論を、以下の表1に整理する。

ベルギーにおけるキリスト教民主主義政党は、初期、宗派政党として教会の政治的利益を擁護するために成立した。その後、政権を担い、超階級政党として成長した。ここには冷戦構造、とくに「反共産主義」という政治思潮が影響していたと考えられる。それを反映した政策、イデオロギーが「人格主義」である。

表1 冷戦後のCVPないしCDVの揺らぎ

| 時代 | 1989 | | 1999 | | 2003 | | 2007 | | 2010 | |
|----------|-----------|--|-----------------|--|----------------------|--|---------------------|--|------|-----------------------|
| | 冷戦 | | 冷戦後 | | | | | | | |
| 党名 | CVP | | | | CDV | | | | | |
| 与野党 | 与党 | | | | 野党 | | | | 与党 | |
| カルテル | | | | | N-VA | | | | ? | |
| アイデンティティ | 人格主義 | | 人格主義 + 連帯 | | 人格主義 VS フランデレン | | 人格主義 + フランデレン | | | 人格主義 VS フランデレン? |
| | キリスト教民主主義 | | | | フランデレン・ キリスト教民主主義 | | | | ? | |

ベルギーが言語紛争で苛まされるなかでCVP/PSCは「人格主義」を掲げながら、分裂と支持率の低下を経験する。これはもちろん言語紛争による帰結であるが、冷戦構造が変容するなかでの、自らの既成化に対する市民の反発によるものでもあった。共産党という仮想敵が国内に顕在化していないベルギーにおいては、長く与党を維持してきたキリスト教民主主義政党にその批判の目は向けられていた。

しかし、表1に示したとおり、冷戦終結後、CVPないしCDVは流動化していく。新自由主義を掲げる自由党、環境政党、民族主義政党の台頭など、政党間競争が高まるなかで、やはり与党として諸問題に対応していたCVPは「人格主義」を、「社会的」「連帯」と対抗的にアレンジしつつ、基本的に維持する。しかし支持を一層低下させ、結局政権を奪われる。

その後選挙区改革を背景に、彼らは「地域」志向を打ち出しCDVと党名変更する。しかし政策的に「人格主義」からの脱却はできず、二〇〇三年選挙で再び敗北する。その後、二〇〇四年以降N-VAとカルテルが形成さ

れて、CDVは六〇年代以降分離していたものを統一し「フランデレン・キリスト教民主主義」化した。これによって二〇〇七年まで選挙パフォーマンスは一時的に回復する。少なくとも、本稿の二義的な目的であるNVAとの連合に注目する限り、CDVは「フランデレン・キリスト教民主主義」政党である。

しかしその後信任を問われNVAと決別し、これが二〇一〇年の選挙パフォーマンスの低下につながった。執筆時現在、ベルギーの政党は一〇月の地方統一選の準備に取り掛かっているが、現時点のCDVが掲げるイデオロギーは、以下のようなものである(CDVHP)。

- 四つのV：Verzorgen（ケア・介護）：Vooruitzien（前へ・環境と福祉）：Verbinden（つながり・家族や社会形成）：Versterken（強化・雇用のための教育）
- これらをつなぐキリスト教（人格主義）

興味深いのは、V^gが、党名の一部である“*Vlaams*”を直截的に指していないことである。もちろん最後の「強化」においては「フランデレンの強化」が述べられてはいるが強くは映らない。二〇一二年一〇月の選挙が地方選であり、その意味であまり「フランデレン」を打ち出す必要はないのかもしれないが、二〇〇九年の地域議会選挙では「フランデレン」を打ち出していた。差は明確である。

かつ二項目で「キリスト教」を謳い、「つながり」の項目では「人格主義」に触れている点も興味深い点である。二〇〇〇年代に入り、「地方」重視、そしてルテルムの「フランデレン・キリスト教民主主義」のなかで、むしろ目立っていたのは「フランデレン」であった。現在の状況まで考慮しようとするれば、CDVは紆余曲折を経て、改めて（形容詞のない）「キリスト教民主主義」政党に回帰していると言いうるだろう。否、冒頭の武居の問いに答えようとする

るならば、伝統的にキリスト教民主主義政党のアイデンティティとされてきた「人格主義」は、冷戦終結後も——揺れながら——維持されていると言わなければならない。

しかし、状況は流動的である。現時点ではN-VAと自由党とのカルテルの動きが見られ、CDVは社会党とカルテルの動きが見られる(*Gazet* 27/12/2011)。さらに、この夏のCDVのマニフェスト委員会は、「我々はフランデレンの市、町、選挙区、近隣が、人びとが集い、安息、安寧を得られ、あらゆる年代が生きることできる空間であることを望む」(03/07/2012 CDV デインゼ支部HP)と、再び「フランデレン」を打ち出してもおり、CDVの状況も流動的である。

現在は二〇一〇年の失敗を取り戻すべく、かつての「人格主義」を打ち出しつつ、しかし今なお「フランデレン」も打ち出す可能性を秘め、どこにたどり着くべきか、CDVはさまよっているように見える。

しかし、ベルギーの場合、冒頭で記したように、政権形成交渉が政党にとつてきわめて重要である。二〇一〇年の選挙では得票率を激減させ敗北したはずのCDVが、長期の交渉の結果、与党に加わっていることがそれを示している。その点を考慮すれば、政策やイデオロギーを差異化して打ち出すことによって選挙に勝つことを至上命題としなくとも、現在の破片化したベルギーの政党システムにおいては、既成政党には政権に加わる機会が常にあると言える。「理想」や「ビジョン」ではないのである。ルテルムはかつて、自らが「共和主義者か」と問われた時に、「現実主義者である」と答えている(Leterme, 2006: 117)が、もし冷戦後からこんにちのCDVのアイデンティティを一言で示せと問われるならば、その「現実主義」こそが、最も適切な解答なのかもしれない。

先に見たとおり、ペーケやヴァン・ヘッケは、こうした「アイデンティティの曖昧さ」を批判的ないし悲観的に指摘している。しかし、先の二〇一〇年以降の交渉過程で指摘したとおり、自由に色を変えうるし、自由に連立しうる。「理想」ではない。それは「現実」に政権に加わるための道である。そして現在のベルギーの混乱した状況を見る限り、

ワロンとフランデレンの分極化が進むなかで、こうした「理想」や「ビジョン」をもたない「現実主義」の政党こそが、自由に変化し、あらゆる政党をパートナーとしながら、「超階級」から「超地域」政党として、ベルギーをつなぐ可能性を有しているのかもしれない⁽²⁹⁾。

追記 本稿は二〇一二年度日本政治学会 自由企画D-4「冷戦以降のキリスト教民主主義」にて報告したものを改訂したものである。とくにオーガナイザーの土倉莞爾会員、司会の伊藤武会員、コメンテーターの津田由美子会員、野田昌吾会員、当日の参加者に感謝したい。

本稿は、科学研究費補助金(基盤C)「ベルギー連邦化改革の『意図せざる結果』」(研究代表者 松尾秀哉)(研究課題番号・二四五三〇一四四)(主に1-3節)、科学研究費補助金(基盤B 海外学術調査)「マルチレベル・ガバナンス化するヨーロッパの民主的構造変化の研究」(研究代表者 小川有美)(研究課題番号・二三四〇二〇一九)(主に4節)の成果の一部である。

注

- (1) 先の学校補助金をめぐる問題による。
- (2) 二〇一〇年選挙でのワロンでの第一党。全体でも第二党で、二〇一〇年連邦選挙後の一年半の交渉を経て、PSの党首、エリオ・ディ・ルポ(Elio Di Rupo)が現在首相。
- (3) マリタンについては、Marian, Jacques (1942), *Les droits de l'homme et la loi naturelle*, Editions de la Maison française;

Maritain, Jacques (1936), *Humanisme intégral: problèmes temporels et spirituels d'une nouvelle chrétienté*, Fernand Aubier を参照した。

- (4) もちろんそれ以外の研究が皆無というわけではなく、たとえば東欧研究を含む各国の政治史研究 (Gehler and Kaiser, 2004) / 福祉国家研究 (van Kersbergen and Philipp Manow, 2009) / わが国においても田口・土倉編 (二〇〇六) は重要であり、一定の成果を挙げている。本稿もこれらの成果から示唆されている。
- (5) ここでいう「コミュニケーションリズム」の意味については後述する。
- (6) 他に Van Haute, 2011 や Pilet, 2011 は政党組織の変容、マニフェストの変容などを丁寧に検討している。
- (7) 政党の変化を見る視角は、政党内組織構造の変化に注目する視点 (岩崎, 二〇〇二: 一六六) に注目するなど、その視点は数限りない。さらに近年の新政党台頭の条件を模索した日野によれば、コーポラティズム、ヴォラティリティの程度、政策空間 (他の政党の政策位置) なども政党の変化に影響を及ぼす (Hino, 2012, 92-96)。またキツチェルトは、社会民主主義政党、極右政党、環境政党の変容や台頭を、社会的価値の変化と党内政治過程の点から論じていることは既によく知られている (Kitschelt, 1989; 1994; 1995)。筆者も、過去キリスト教民主主義政党が超階級政党である点に注目して、党内政治過程やリーダーシップに注目して一九世紀末のベルギーのキリスト教民主主義政党の変容や、一九六〇年代のキリスト教民主主義政党の変容を論じたことがある (松尾, 二〇〇〇, 二〇一〇 a)。本稿でも基本的にその点に注目したい。ただし本稿では、以下のような時代の複雑さを考慮し、記述的に変化を論じたい。
- (8) ちなみにヴァン・ヘッケ氏も筆者とのインタビュアーのなかで、『冷戦の終結』がベルギーのキリスト教民主主義政党に及ぼした最も直接的な影響は何だと思われませんか」との問いに対して「自由主義者と社会民主主義者との相違がなくなってきたこと」と答えている。いわゆる政党の収斂を指す (二〇一二年八月二四日インタビュアー)。これも、政党間競争の高まりを示唆している。
- (9) オーストリア…三・五 / デンマーク…四・八 / フィンランド…五・八 / フランス…六・二 / ドイツ…三・九 / イタリア…六・九 / ルクセンブルグ…四・六 / オランダ…五・五 / ノルウェー…五・三 / スペイン…三・二 / スウェーデン…四・四 / スイス…六・四 / イギリス…三・三。

(10) ただし、ヴォラティリティとの相関を見ると、ベルギーは「有効政党数」は「多い」が、「ヴォラティリティ」の度合いは相対的に「低い」国家として「例外」に分類されている (Lane, 2008: 182 Figure 6.1)。有権者行動に注目するよりも、エリート行動に注目することで何か知見が得られるかもしれない。ただし他方でヴァン・ヘッケは、この時期のベルギーのヴォラティリティは高いと指摘しており (Van Hecke, 2012: 3)、「この点を突き詰めることは、他の政党の党改革等にも十分目を向ける必要があり、現在構想、執筆中の別稿で論じることとしたい」。

(11) なお二〇〇七年危機以降 (二〇一〇年危機以前) のベルギーの情勢と欧州統合の関係については、若干ではあるが、松尾二〇一bで触れた。ただしキリスト教民主主義政党研究の範疇ではない。

(12) なお、ヴァン・ヘッケ氏も、少なくとも組織構造、政策、パフォーマンスという点において、直截的影響はないと答えていた (二〇一二年八月二四日インタビュー)。

(13) また本稿では十分に取り上げられないが、宗教との関係を本来は考慮しなくてはならないだろう。従来この点は「世俗化」という視点で論じられてきた。デスハウアーが世俗化をキリスト教民主主義政党の衰退の理由として挙げたように、確かに世俗化の進行は、宗教政党のパフォーマンスの低下要因として挙げられる (Deschauer, 1999: 81)。しかし、それは「パフォーマンスの低下」要因であって、必ずしも「アイデンティティ」の変化とは直截的に結びつかないだろう。また、「世俗化」の因果性についても様々な議論がある。ホーハらは、(礼拝出席という点で) 世俗化が進行していても、それでも葬儀や結婚等でかわる宗教的帰属意識が投票行動に影響を及ぼしていることを指摘している (Botteman and Hooghe, 2009)。また、ノリスとイングルハートは「キリスト教世界では、教皇、司教、司祭は、時折国王や皇帝の意志と結びつきながら、かつて強大な政治的影響力を有していた。……しかしこんにち彼らの発言は、他の多くの発言のひとつにすぎない。同様に、教育、健康、そして貧困の解消に対する教会の以前の優越的な役割は、福祉国家の登場によって取って代わられた。……教会と国家の関係が劇的に変化したのは疑いがない。それにもかかわらず、宗教は政治に対して大きなインパクトを与え続けている」(Norris and Inglehart, 2011: 196)として、世俗化しているにもかかわらず宗教の影響を無視できないと指摘する。カリヴァスらが指摘するように、キリスト教民主主義政党研究にとって、そもそも「多くの研究者を悩ませていた点はキリスト教民主主義と宗教との関係である」(Kalivas and van Kersbergen, 2010: 187)。とういうのも、第一に、宗教政党が世俗的な政策を採用しながら世俗的社会を統治しなければならないというパラドクスがあった(田口、

二〇〇八・一三) ため、第二に、「教会側も政治への関与を避けなければならず、普遍的「教義的」アイデンティティを固持することはできなかった」ため、「キリスト教民主主義を公的な教会や、いわゆるカトリック文化と混同させてはいけな」という一般的な合意があった」(Kalyvas and van Kersbergen, 2010: 187) からである。しかしながら、だからといって教会とキリスト教民主主義(政治)を全く切り離してしまえば、「宗教が異質な構成を有する社会を束ねて土台にしている」キリスト教民主主義の超階級の性格を失ってしまう(Kalyvas and van Kersbergen, 2010: 187-188)。ここにキリスト教民主主義の「宗教と政治」を扱う難しさ、ジレンマがある。しかし、たとえば、「……ベルギーにおいても、ピウス二世の回勅に勇気づけられたカトリックの若い知識人たちは、ベルギーにおける近代的な自由主義の価値の優勢を逆転しようとする英雄的で対決的なカトリシズムを唱道した」(土倉, 二〇〇八・一八三) など、少なくとも過去教皇回勅やカトリック教会と政党との関係を論じる研究や、とくに冷戦終結後、アメリカ神学の立場からならば、「ネオコン(宗教右翼)が、冷戦の終結で『反共産主義』というターゲットを喪失し、仮想敵として同性愛者やフェミニストを批判するようになった」(Woganan, 2000: 104) という指摘もあり、アイデンティティを考察するに当たり、宗教勢力や神学の影響を全く無視していいとは思われない。ただし、筆者の力量を考慮すれば手に余る領域であり、この点は注に記すにとどめる。

(14) 先のレックス党がカトリック党から派生したことなどを受け、戦後カトリック党は党改革を試み、党執行部の権限強化、派閥の解消などを進め、フランス語とオランダの表記を両方明示したCVP/PSCへ改称した。

(15) たとえば、一九四五年に初代国連総会議長を務めたポール・アンリ・スパーク(Paul-Henri Spaak)などが国際舞台で活躍した。スパークは国際連合総会第三回会議でソ連代表団に「私たちはあなた方を恐れている」と呼びかけたことで知られている(S.E.M. Louis Michel, 2002) が、後にCVPのヒヤストン・エイスケンス(Gaston Eyskens)と政治的に対立する——本来社会党である——スパークが共産主義に対して懸念を抱いていたことは、当時のベルギーの政治家が党派を超えて「反共産主義」でまとまっていたことを示唆している。

(16) なお教皇は、既に著名な『レウム・ノヴァルム』(一九九一年)『クアドラジエジモ・アンノ』(一九三一年)において「人格」の重要性を謳っているが、明確に反共産主義を打ち出したものとして、ピウス二世の『デイヴィニ・レデンプトーリス』(一九三七年)を挙げる事ができる。「第二章 共産主義の理論と結果」と題された章のなかで、「……その上、共産主義は、倫理的行為の精神的原理である自由を人間から剥ぎとり、人間のペルソナ「人格」から、その尊厳を構成する

もの、盲目的な本能の攻撃に対して倫理的に抵抗するものを奪うのである。個人は、集団に対して、人間のペルソナが自然にそなえている権利をなにとつ主張することができない。共産主義においては、人間のペルソナは、機構のなかのひとつの歯車にすぎない。……」(para.10)、「尊敬すべき兄弟たちよ、以上が、過激で無神的共産主義が救済と贖罪とのメッセージとして世界に告げようとする新しい福音である。これは、理性と神の啓示とに反する誤謬と詭弁とにみちた体系であり、社会の根底そのものを破壊するがゆえに社会秩序を壊乱する理論であり、国家の真の起源、性質、目的をはじめ、人間のペルソナの諸権利、その尊厳、その自由を無視する体系である」(para.14)として「人格」を破壊する共産主義を批判する(ピオー一世回勅、カトリック社会文化研究所監修、岳野慶作訳・解、『デイヴィニ・レデンプトーリス——無神的共産主義について——』、中央出版社)。

(17) これは、たとえばドイツのプロテスタント神学者であり、政治にも影響したパウル・ティリッヒに見られるように(高橋、二〇〇五)、当時の西側諸国のキリスト教会に一定の影響力を有したと考えられる。

(18) また、主に六〇年代末から七〇年代にかけてベルギーのカトリック世界においては、アメリカの自由主義神学の影響を受けて、カリスマ運動と呼ばれる刷新運動が広がった。これは、ベルギーにおいては、聖職者の結婚を認める運動として展開され(Chadwick, 1992)、職制をめぐる議論が起きた。管見だが、このようなカトリック内部の揺らぎが、六〇年代の抵抗運動を引き起こした遠因にあるかもしれない。

(19) 一九七〇年代のデタント期では、キリスト教民主主義政党の支持は高まる。この逆説的な一時的帰結は、「新世代のティンデマンス(Leo Tindemans)」、マルテンス(Wilfried Martens)を立て、党は七〇年代の選挙に次から次へと勝利した」(CDVHP)とあるとおり、分権化改革が進むなかで「連邦主義」を掲げてきた新しいリーダーの人気に負うところが大きいのだろう。

(20) 彼のスキャンダルのイムバクトについては、既出のヴァン・ヘッケ氏と筆者の意見は食い違っている。与党としての信頼を失い、結果、一九九九年の政権交代の遠因となっていないかという筆者に対して、彼は「それはない。この事件が一九九六年で、一九九九年には有権者はこのことを忘れていた」と述べている(二〇一二年八月二四日インタビュー)。

(21) デミトリ・ヴァンオーヴェルベーク氏は、筆者とのインタビューにおいて、この時期のデュトゥルー事件、ルノー問題、そしてサベナ倒産とが、従来の国家、政治のあり方に対する異議をベルギー国内で強くし、老齢の政治家(デハーネやマル

テンス)に対する批判と世代交代を早めたターニング・ポイントだったのではないかと答えている(二〇一二年八月二三日インタビュー)。

(22) 選挙の二週間前に自由党が「鶏にダイオキシシンが含まれていた」ことを公表した。閣僚辞任などが相次いだ。

(23) 再びヴァン・ヘッケ氏の意見を参照すれば、彼はここでのCVPの敗北は、あくまで「ダイオキシシン事件」の結果であり「一時的」だと述べていた(二〇一二年八月二四日インタビュー)。この点は先の注でも示したように、筆者と意見が若干異なるところである。

(24) Rogiers, 2006: 81によるルテルムの発言。

(25) CDVのヘルマン・ヴァンロンパウが政権を担ったが、その一年後には彼が初代欧州理事会常任議長に選出され、ベルギー首相を辞し、再びルテルムが政権を担った。

(26) もちろん国家改革などの論点は述べられているが、少なくとも見出し、キャッチフレーズのレベルでは記されていない。

(27) これは、ヴァン・ヘッケ氏が述べる「この「二〇〇七年の」成功の大部分はフランデレンの自治を強化するカルテルであることの強調にあった」(Van Hecke, 2012: 6) すなわちN-V Aとのカルテルによって勝利したことを裏付けるものであった。

(28) ここでのCDVが提示した条件とは、BHV選挙区の分割を無条件に行うことである。BHV問題についてはあまりに複雑なのでここでは記さないが、やはり松尾、二〇一一年aを参照されたい。

(29) なお、教皇ヨハネ・パウロ二世は、混乱する冷戦後の世界に『和解とゆるし (Reconciliatio et Paenitentia)』と題された勅告を発している。それによれば、現代世界のうちにある痛ましい分裂を生み出す原因として、一、人間の基本的権利が踏みにじられていること、二、個人と集団の自由に対して行われている攻撃と圧力、三、民族、文化、宗教などに対する差別、四、暴力とテロリズム、五、拷問や抑圧、六、軍拡競争、七、資源や富の不公平な分配、などが挙げられる。そしてこの分裂を克服するために「ゆるしと和解」が必要であることを説く。ここでヨハネ・パウロ二世による社会主義失敗の要因は、人間の個人の自由(個人主義ではなく「社会の主体性」)が消失したこと、無神論(神との応答によって人間の尊厳に気付くことを否定すること)、階級闘争(党派的利益の優先)による。しかし、彼によれば、一九八九年は必ずしも資本主義の勝利を意味しない。今もなお分裂状況で世界は満ちている。管見だが、結局、本回勅は「特定のイデオロギーに

属するな」以上の具体的なメッセージを欠いているように思われる。これは冷戦後のCVPの姿と近似しているように思われてならない。つまり回勅のメッセージの曖昧さが、CDVの「現実主義」の思想的、宗教的遠因になっているとは考えられないだろうか。

参考文献

- Beyers, J., Bursens, P. (2006), "The European Rescue of the Federal State' *ECPR Pan-European Conference on EU Politics*, 21–23 September, Istanbul, Turkey.
- Botterman, Sarah and Marc Hooghe (2009), "The Christian Democratic Vote and Religious Belonging: The Relation between Religious Beliefs and Christian Democratic Voting and the Individual and Community Level in Belgium," Paper presented at the *5th General Conference of the European Consortium for Political Research (ECPR)*.
- Brzinski, Joanne Bay (1999), "Changing Forms of Federalism and Party Electoral Strategies: Belgium and the European Union," *Publius*, Volume 29, Issue 1, pp.45–70.
- Beke, Wouter (2004), "Living Apart Together: Christian Democracy in Belgium," Van Hecke, Steven, Emmanuel Gerard, eds., *Christian Democratic Parties in Europe since the End of the Cold War*, Leuven: Leuven University Press, pp. 133–158.
- Chadwick, Owen (1992), *The Christian Church in the Cold War*, Harmondsworth: Allen Lane.
- Conway, Martin (2003), "The Age of Christian Democracy, The Frontiers of Success and Failure," Thomas Kselman and Joseph A. Buttigieg eds., *European Christian Democracy, Historical Legacies and Comparative Perspectives*, Notre Dame: Notre Dam U.P., pp.43–67.
- Coppa, Frank J. (2003), "Pope Pius XII and the Cold War: The Post-war Confrontation between Catholicism and Communism," *Dianne*

- Kirby ed. *Religion and the Cold War*, Hampshire: Palgrave Macmillan, pp.50–66.
- Dandoy, Régis (2009), "Comparing Different Conceptions and Measures of Party Positions," paper for Workshop "Comparing Different Conceptions and Measures of Party Position," Politicologenthaal, 28–29 May.
- Dandoy, Régis (2011), "Territorial Reforms, Decentralisation and Party Positions in Belgium," paper for CEPSA Annual Conference "Multi-level Politics: Intra- and Inter-level Comparative Perspectives," Vienna, 27–29 October 2011.
- Delwit, Pascal (2011), "Partis et systèmes de partis en Belgique en perspective," Pascal Delwit, Jean-Benoit Pilet, Émilie Van Haute ed., *Les partis politiques en Belgique*, Bruxelles: Éditions de l'université de Bruxelles, pp.7–33.
- Deschouwer, Kris (1999), "From consociation to federation, How the Belgian parties won," Kurt R. Luther and Kris Deschouwer eds., *Party Elites in Divided Societies, Political Parties in Consociational Democracy*, London: Routledge, pp.74–107.
- Detterbeck, Klaus and Eve Hepburn (2010), "Party politics in multi-level systems, Party response to new challenges in European democracies," Jan Erk, and Wilfried Swendeneds, eds., *New Directions in Federalism Studies*, London: Routledge, pp.106–125.
- Doležalová, Iva, Luther H. Martin, and Dalibor Papoušek (2001), eds., *The Academic Study of Religion during the Cold War*, New York: Peter Lang.
- Erk, Jan (2005), "From Vlaams Blok to Vlaams Belang: The Belgian Far-Right Renames Itself," in *West European Politics*, Vol. 28, No.3, pp.493–502.
- Foret, François and Xavier Izcaina (2012), *Politics of Religion in Western Europe: Modernities in Conflict?*, London: Routledge.
- Fox, Jonathan (2003), *A World Survey of Religion and the State*, Cambridge: Cambridge U.P.
- Gehler, Michael, Wolfram Kaiser (2004), "Toward a Core Europe" in a Christian Western Bloc, Transnational Cooperation in European Christian Democracy, 1925–1965," Gehler, Michael, Wolfram Kaiser (2004), eds., *Christian Democracy in Europe Since 1945: Volume 2*, London and New York: Routledge, pp.240–266.
- Gehler, Michael, Wolfram Kaiser (2004), eds., *Christian Democracy in Europe Since 1945: Volume 2*, London: Routledge.
- Hanley, David (1994), ed., *Christian Democracy in Europe: A Comparative Perspective*, London: Printer.
- Hanson, Eric O. (2006), *Religion and Politics in the International System Today*, Cambridge: Cambridge U.P.

- Hino, Airo (2012), *New Challenger Parties in Western Europe: A Comparative Analysis*, London: Routledge.
- Hollenbach, David (2003), *The Global Face of Public Faith: Politics, Human Rights, and Christian Ethics*, Washington, D.C.: Georgetown U.P.
- Hooghe Marc, Kris Deschouwer (2011), "Veto Players and Electoral Reform in Belgium," in *West European Politics*, Vol.34, No.3 (accepted). (<http://soc.kuleuven.be/pol/docs/2011/28720-vetoplayrs.pdf> 1011年11月18日)
- Irving, R.E.M. (1979), *The Christian Democratic parties of Western Europe*, London: Allen and Unwin.
- Kaiser, Wolfram (2007), *Christian Democracy and the Origins of European Union*, Cambridge: Cambridge University Press.
- Kalyvas, Stathis N. (1996), *The Rise of Christian Democracy in Europe*, New York: Cornell U.P.
- Kalyvas Stathis N. and Kees van Kersbergen (2010), "Christian Democracy," *Annual Review of Political Science*, Vol.13, pp.183–209. (<http://www.polisci.annareviews.org> 1011年04月19日)
- Kent, Peter C. (2003), "The Lonely Cold War of Pope Pius XII," Dianne Kirby ed., *Religion and the Cold War*, Hampshire: Palgrave Macmillan, pp.67–76.
- Kirby, Dianne (2003), "Religion and the Cold War—An Introduction," Dianne Kirby ed., *Religion and the Cold War*, Hampshire: Palgrave Macmillan, pp.1–22.
- Kitschelt, Herbert (1989), *The Logics of Party Formation: Ecological Politics in Belgium and Germany*, New York: Cornell University Press.
- Kitschelt, Herbert (1994), *The Transformation of European Social Democracy*, Cambridge: Cambridge University Press.
- Kitschelt, Herbert, in collaboration with Anthony J. McGann (1995), *The Radical Right in Western Europe: A Comparative Analysis*, Michigan: University of Michigan Press.
- Kselman, Thomas (2003), "Introduction: The History and Legacy of European Christian Democracy," Thomas Kselman and Joseph A. Buttigieg eds., *European Christian Democracy, Historical Legacies and Comparative Perspectives*, Notre Dame: Notre Dam U.P., pp.1–10.
- Lamberts, Emiel (1997), *Christian Democracy in the European Union, 1945–1995*, Leuven: Leuven University Press.

- Lamberts, Emiel (2003), "Christian Democracy and the Constitutional State in Western Europe, 1945-1995," Thomas Kselman and Joseph A. Buttigieg eds., *European Christian Democracy, Historical Legacies and Comparative Perspectives*, Notre Dame: Notre Dam U.P., pp.121 –137.
- Lamberts, Emiel (2004), "The Zenith of Christian Democracy: The Christelijke Volkspartij/Parti Social Chrétien in Belgium," Gehler, Michael, Wolfram Kaiser (2004), eds., *Christian Democracy in Europe Since 1945*: Volume 2, London and New York, Routledge, pp.67–84.
- Juergensmeyer, Mark (1993), *The New Cold War? Religious Nationalism Confronts the Secular State*, Berkeley, Los Angeles, and Oxford: University of California Press.
- Lane, Jan-Erik (2008), *Comparative Politics: The principal-agent perspective*, London: Routledge.
- Laver, Michael Kenneth Benoit (2006), "Party system change: evidence of changing policy spaces," prepared for the *International Political Science Association Meeting*, July 12, 2006. Session: "Party System Change," IPSA Session 308, no. 21 by Prof. Kato, July 12th.
- Leterme, Yves, in gesprek met Filip Rogiers (2006), *Leterme uitgedagde*, Tielt: Uitgeverij.
- Norris, Pippa and Ronald Inglehart (2011), *Sacred and Secular: Religion and Politics Worldwide*, 2nd. Ed., Cambridge: Cambridge U.P.
- Strikwerda, Carl (2003), "Parties, Populists, and Pressure Groups: European Christian Democracy in Comparative Perspective," Thomas Kselman and Joseph A. Buttigieg eds., *European Christian Democracy, Historical Legacies and Comparative Perspectives*, Notre Dame: Notre Dam U.P., pp.267 –292.
- Swenden, Wilfried (2012), "Belgian federalism: Means to an end?," Ferran Requejo and Miquel Caminal eds., *Federalism, Plurinationality and Democratic Consistionalism: Theory and cases*, London, New York: Routledge, pp.137 –170.
- Misner, Paul (2003), "Christian Democratic Social Policy: Precedents for Third-Way Thinking," Thomas Kselman and Joseph A. Buttigieg eds., *European Christian Democracy, Historical Legacies and Comparative Perspectives*, Notre Dame: Notre Dam U.P., pp.68–92.
- Pilet, Jean-Benoit (2005), "Strategies Under the Surface: The Determinants of Redistricting in Belgium," in *Comparative European*

- Politics*, Vol.5, pp.205–225.
- Reese, Thomas J. (1996), *Inside The Vatican, The Politics and Organization of the Catholic Church*, London: Harvard U.P.
- Rogiers, Filip (2006), *Leterne au défi*, Bruxelles: Edition Luc Pire.
- Schmidt, Vivien A. (2006), *Democracy in Europe: The EU and National Politics*, Oxford: Oxford U.P.
- Seelb-Kaiser, Martin, Silke van Dyk, Martin Roggenkamp (2008), *Party Politics and Social Welfare: Comparing Christian and Social Democracy in Austria, Germany and the Netherlands*, Cheltenham: Edward Elgar.
- Stepan, Alfred (2011), “The Multiple Secularisms of Modern democratic and Non-Democratic Regimes,” Craig Calhoun, Mark Jurgensmeyer, and Jonathan van Antwerpen eds., *Rethinking Secularism*, Oxford: Oxford U.P., pp.114–165.
- Swenden, Wilfried (2012), “Belgian federalism: Means to an end?,” Ferran Reguejo and Miquel Caminal eds., *Federalism, Plurinationality and Democratic Consociationalism: Theory and cases*, London: New York: Routledge, pp.137–170.
- Van Haute, Émilie (2011), “Le CD&V (Christen-Democratisch&Vlaams),” Pascal Delwit, Jean-Benoit Pilet, Émilie Van Haute edit., *Les partis politiques en Belgique*, Bruxelles: Éditions de l’université de Bruxelles, pp.35–61.
- Van Haute, Émilie, Jean-Benoit Pilet and Giulia Sandri (2012), “Still religious parties in Belgium?: The decline of the denominational cleavage in Belgian consociational democracy,” Foret François and Xabier Itçaina (2012), *Politics of Religion in Western Europe: Modernities in Conflict?*, London: Routledge, pp.144–169.
- Van Hecke, Steven (2010), “Do Transnational Party Federations Matter? (... and Why Should We Care?),” *Journal of Contemporary European Research*, 6 (3), pp.395–412.
- Van Hecke, Steven (2012), “Christian Democracy in Belgium,” paper for the *Journal of Kansai University of Law and Politics* (forthcoming). ※
- Van Hecke, Steven, Emmanuel Gerard (2004), “European Christian Democracy in the 1990s: Towards a Framework for Analysis,”
- Van Hecke, Steven, Emmanuel Gerard, *Christian Democratic Parties in Europe since the End of the Cold War*, Leuven: Leuven University Press, pp.9–19.
- Van Kemseke, Peter (2006), *Towards an Era of Development: The Globalization of Socialism and Christian Democracy, 1945–1965*,

Leuven: Leuven University Press.

van Kersbergen, Kees (1995), *Social Capitalism: A Study of Christian Democracy and the Welfare State*, London and New York, Routledge.

van Kersbergen, Kees and Philip Manow (2009) eds., *Religion, Class Coalitions, and Welfare States*, Cambridge: Cambridge U.P.

Tillich, Paul (1965), *In memoriam Paul Tillich 1886–1965: Nachrufe Ansprache Paul Tillichs auf der "Convocation Pacem in Terris," New York, Februar 1965*, Stuttgart: Evangelisches Verlagswerk.

Warner, Carolyn M. (2003), "Strategies of an Interest Group: The Catholic Church and Christian Democracy in Post war Europe,"

Thomas Kselman and Joseph A. Buttigieg eds., *European Christian Democracy, Historical Legacies and Comparative Perspectives*, Notre Dame: Notre Dame U.P., pp.138–163.

Wogaman, Philip J. (2000), *Christian Perspectives on Politics*, revised and expanded, Louisville: Westminster John Knox Press.

G・アリギ、I・ウォーラーズテイン、T・K・ホプキンス、太田仁樹訳(一九九八)『反システム運動』、大村書店。
岩崎正洋(二〇〇二)『議会制民主主義の行方』、一藝社。

菅英輝(二〇〇二)「冷戦の終焉と六〇年代性——国際政治史の文脈において」、『国際政治』、一二六号、一一二二頁。

小島健(二〇〇七)『欧州建設とベルギー 統合の社会経済史的研究』、日本経済評論社。

高橋良一(二〇〇五)「平和への希望」現代キリスト教思想研究会『テイリッヒ研究』、第九号、三三二—四二頁。

武居一正(二〇一三)「ベルギーの政変 *crisepolitique* (二〇一〇—二〇一一年)について——その憲法的问题点を中心に——」、『福岡大学法学部『福岡大学法学論叢』、五六巻四号、三六三—四一三頁。

田口晃(二〇〇八)「キリスト教民主主義の歴史的位相」、田口晃・土倉莞爾編『キリスト教民主主義と西ヨーロッパ政治』、木鐸社、九一—七頁。

土倉莞爾(二〇〇八)「ベルギーのキリスト教民主主義——戦中から戦後への変容」、田口晃・土倉莞爾編『キリスト教民主主義と西ヨーロッパ政治』、木鐸社、一八三—二〇七頁。

松尾秀哉(二〇〇〇)「キリスト教民主主義政党的『調停の政治』メカニズム——ベルギーにおける初期福祉国家改革期のカト

リック党の党内政治過程——、国際関係論研究会編『国際関係論研究』、一五号、五九—八五頁。

松尾秀哉（二〇一〇a）「ベルギー国家分裂危機——連邦化以降の政治主体の行動変化」高橋直樹・岡部恭宜編『構造と主体——

比較政治学からの考察』、東京大学社会科学研究所、SSIRシリーズ、Vol.35、五—二六頁。

松尾秀哉（二〇一〇b）『ベルギー分裂危機——その政治的起源』、明石書店。

松尾秀哉（二〇一〇a）「ベルギー分裂危機と合意型民主主義」、田村哲樹・堀江孝司編『模索する政治——代表制民主主義と福祉国家のゆくえ』、一八六—二〇五頁。

松尾秀哉（二〇一〇b）「ベルギーと欧州統合——EU大統領・その後のベルギー」田中浩責任編集『EUを考える』、現代思想

——その思想と歴史3、未来社。

水島治郎（一九九三）「ヨーロッパ政治の基層——『二つの民主主義』の視点から」、見田宗介・樺山紘一編『ヨーロッパのアイデンティティ』、ライブラリー相関社会科学I、新世社、七七一—九四頁。

水島治郎（二〇〇二）『戦後オランダの政治構造——ネオ・コーポラティズムと所得政策』、東京大学出版会。

水島治郎（二〇〇八）「キリスト教民主主義とは何か——西欧キリスト教民主主義概論」、田口晃・土倉莞爾編『キリスト教民主主義と西ヨーロッパ政治』、木鐸社、一九—四四頁。

吉田徹（二〇〇八）「フランスと欧州統合過程——『政策の失敗』による統合の推進？」聖学院大学総合研究所編『聖学院大学総合研究所紀要』、第四一号。

新聞

de standard, de Morgen, le Soir, Gazet Van Antwerpen

HP

ベルギー連邦政府HP <http://www.belgium.be/>（二〇一二年六月二〇日）

フランデレン国营放送（VRT）ニュース <http://www.dereclatie.be/cm/vrtnieuws.english>（二〇一二年二月一六日）
政党HP

CDV www.cdenv.be/

(<http://www.cdenv.be/onze-partij/geschiedenis-0>) (党による歴史解説) (二〇一二年八月一〇日)

(<http://www.cdenv.be/sites/default/files/pages/documents/cdenv-verkiezingsprogramma-2009.pdf>) (二〇〇九年綱領) (二〇一二年八月一〇日)

(http://www.cdenv.be/sites/default/files/pages/documents/2010_federaal_verkiezingsprogramma_cdv_goedgekeurd_congres_22052010_0.pdf) (二〇一〇年綱領) (二〇一二年八月一〇日)

(<http://www.cdenv.be/wie-zijn-we/ideologie>) (イデオロギー) (二〇一二年八月一〇日)

(<http://www.cdenv.be/actua/foespraak-wouter-beke-10jaar-cdv>) (スピーチによるCDV一〇周年記念講演) (二〇一二年二月一六日)

デインゼ支部 <http://deinze.cdenv.be/> (二〇一二年八月一〇日)

コルトリンク支部 <http://www.kortrijk.cdenv.be/> (二〇一二年八月一〇日)

NVA <http://international.NVA.be/> (二〇一二年二月一六日)

国連総会記録

Discours du S.E.M. Louis Michel

(<http://www.un.org/webcast/ga/57/statements/020915belgium.htm>) (二〇一二年八月一〇日)

インタビュ

Prof. Dr. Dimitri Vanonherbeke 二〇一二年八月二三日一〇時より。ルーヴァン・カトリック大学文学部 (Inkonststraat) の彼のオフィスにて。

Prof. Dr. Steven Van Hecke 二〇一二年八月二四日一一時より。ルーヴァン・カトリック大学 (夏季集中講義中) 政治学部 (Parkstraat45) の彼のオフィスにて。

両者とも本稿でインタビュ内容を掲載することは快諾いただいている。感謝する。

※本稿は二〇一一年五月に関西大学で行われたヴァン・ヘッケ氏講演会の講演記録の草稿である。当日、本務校の業務のため欠席せざるをえなかった筆者に、コーディネーターの土倉莞爾教授が閲覧を許してくださいました。また上記ヴァン・ヘッケ氏のインタビューのために紹介の労をおとりいただいた。深い感謝を記したい。